



二つのみやこ (宮古と京都)

5月のごあいさつ

山内公認会計士事務所
2020年5月1日(金)

「パパラギ」はおもろまちの居酒屋であるが、「白い人」という意味である。南太平洋の島サモアの酋長ツイアビが、はじめてヨーロッパ文明を見たときの演説集である。その素朴な人間性から、白人社会の異常を批評している。

京都の洛中で生まれて28年、東京で3年、それから沖縄に住んで48年になる。友人にすすめられて沖縄と京都の印象をまとめてみた。

ワイフ以外は、ほとんど誰も知り合いはなかった沖縄は小さく狭かった。

来てからの土、日曜日は外へ出かけた。3ヶ月もすると本島では行くところがなくなった。それでも、住んでみると意外に広く、そこは一つの世界であった。京都(みやこ)のせいか、沖縄へ来て最も親しみのある名前はやはり宮古(みやこ)であった。

海の上を飛んでいるような伊良部大橋。最も好きな渡口の浜、まっ白い砂、波は静かで透明度が高く、その先にどこまでも続くエメラルドグリーンのもっとも神秘的な色の海。250年前の明和の巨大津波に驚く、陸まで打ち上げられたという15mもの巨石、帯岩。細い遊歩道を歩くと急に二つの大きな池、二つは地下でつながっていて、更に海まで通じている。通り池とはその名前のおりで、自然の作った不思議である。それを通り過ぎると壮大な海、下地島空港、佐和田の浜。島全体が美しい海に囲まれ、その海の美しさは自然の作品である。

京都は歴史が作って磨きあげた風情だ。年がら年中、静かな、盛大なお祭りをやっているような気分だ。都をどりが済み、桜が終わると、緑一色になる。葵まつりがあって、鴨川に納涼床が出て、祇園祭になり、大文字を焼く。秋になると山は紅くもえ、時代祭りである。いつも混んでいて、なんとなく観光が風景になっている。この二つは違った風景だが、パパラギの評する、白人の作った文明とは異質で、宮古も京都も自然と歴史の作った風景が素晴らしい。京都は言葉も磨かれているが、宮古で畑へ行くことをパリへ行くというのも楽しい表現だ。

宮古の人は、率直で親切だ。沖縄へ来た頃、ある会社の下地さんという総務部長からとても親切にいただいた。宮古が好きになった。宮古の人は行動力があって、商売が上手だ。

京都は、アイデアもユニークで特色のある大企業が多い。しかし、経営者は京都以外の出身が主だ。京都は、源平の昔から歴史の舞台になって満足しているように見える。京都人は、一般に商売が下手で、すぐあきらめる。だから京都人の大企業は、残念なことに数少ない。

長期休暇やコロナ終息後の経済や給料はどうなるのだろうか。安倍さんや各地の知事に対策はあるのだろうか。